

# 前3千年紀半ば南メソポタミアにおける 容量単位並行使用について

堀岡 晴美

On the Synchronous Use of Dry Capacity Measures in Southern Mesopotamia in the  
Middle of the Third Millennium BC

Harumi HORIOKA

前3千年紀半ば、2つの容量単位 – lid<sub>2</sub>(NI)-ga と gur-mah – の並行使用が遺跡テル・ファラ (Tell Fāra, 古代名シュルツパク) 出土文書に見られる。ヴィシカートはファラ文書および諸都市出土文書を調査し、ファラ行政センターが lid<sub>2</sub>-ga の使用をやめ gur-mah を採用したこと、それはキシユの政治的発展と衰退により生じたとの見方を示した。しかし lid<sub>2</sub>-ga はキシユの文書にも北バビロニアにも見られない。2種の容量単位は並存したのであり、当時活動した別個の行政センターが lid<sub>2</sub>-ga と gur-mah を使用したのである。

エブラやマリ文書の研究で得られた情報に基づき新たな視点で取り組んだ結果、つぎのように考えられる。ファラにおいては、シュルツパク・キスラ・ニップル・イシンの周辺にある耕地を管理したセンターが lid<sub>2</sub>-ga を使用し、南メソポタミアとシリアとを結ぶ交易ネットワーク上に位置する行政センターが gur-mah を用いた。

キーワード： lid<sub>2</sub>-ga、gur-mah、ファラ行政センター、ファラ型不動産売買文書、輸送ネットワーク

The simultaneous use of two dry capacity measures in the middle of third millennium BC has been noted in the administrative documents unearthed from Tell Fāra (ancient Šuruppak). G. Viscato studied this issue, when he analyzed these documents. He made two conclusions: 1) the administrative center of Fara discarded lid<sub>2</sub>-ga and adopted gur-mah; 2) this change was caused by the political development and collapse of Kiš. Nevertheless, we find no mention of lid<sub>2</sub>-ga in the documents of Kiš, or even in the documents from north Babylonia. Additionally, the inferences that we can draw from the Fara documents are different from his conclusions. What we can say with certainty is the following: two dry capacity measures coexisted in the Fara documents, because two distinct administrative centers that were active at that time used lid<sub>2</sub>-ga and gur-mah.

At present, we have a lot of new information based on the documents from Ebla and Mari. In light of this information and new research on this issue, it is reasonable to assume that the administrative center that controlled the lands around Šuruppak, Kisura, Nippur, and Isin used lid<sub>2</sub>-ga, and that the other administrative centre was located within the trade network connecting south Mesopotamia and Syria used gur-mah.

Key-words: lid<sub>2</sub>-ga, gur-mah, Fara administrative center, Fara-type sale documents, transport-network

## はじめに

メソポタミアでは前3千年紀前半まで、穀物・穀粉を量る容量単位の名称として使われていたのは gur/GUR だけであった。gur/GUR を計量する杓の容量は一律ではなかったと思われるが、用語に関してはこの一語で表されていたのである。ところが前3千年紀半ばになるとバビロニア南部 (シュメール地方) では、杓の容量の違いを明確にしようとする動きが出てくる。すなわち gur/GUR になんらかの語を追加してほかの gur/GUR と差別化を図るとい

ものである。まず gur-mah という名称がファラ (Fara) 出土文書に現れ (cf. Powell 1989: 495-496)<sup>1)</sup>、その後は gur-saĝ-ĝal<sub>2</sub> (および gur-ĝal<sub>2</sub>, saĝ-ĝal<sub>2</sub>) や gur-si-sa<sub>2</sub> が各地で使用されるようになり、さらに初期王朝期末期のザバラム (Zabalam) では gur-saĝ-ĝal<sub>2</sub> si-sa<sub>2</sub> や gur-saĝ-ĝal<sub>2</sub>-dul<sub>3</sub> のように計量杓の違いをより詳しく表現する名称が登場する。アッカド期には王権の所在地を冠した gur-A-ga-de<sub>3</sub><sup>ki</sup> も現れた (cf. Powell 1978: 492-498, 表1)。

以上挙げた容量単位の呼称はいずれも gur から派生した

ものであるが、ファラ文書の時期には gur-mah のほかに、もう1種の容量単位 lid<sub>2</sub>(ND)-ga も使用されていた。ファラ文書で2種類の容量単位が使用されていることについてかつてヴィシカート (G. Visicato) は2度にわたり論考を著わした。1991年のそれは労働者への定期的大麦支給の量を算出する内容であったが、この中で lid<sub>2</sub>-ga と gur-mah の相互関係に言及し、翌年には lid<sub>2</sub>-ga から gur-mah への移行について論じた。後者の中で彼は、前3千年紀前半のバビロニア南部においてはキシシュ (Kiš) の支配が圧倒していたが、ファラ文書が作成されたころにはキシシュはすでに衰退しており、このような勢力の盛衰がファラ文書で使用される容量単位の推移に影響を及ぼした、と主張した (Visicato 1992: 3, 9)。

ファラ文書に限らず一都市の文書内で同時期に複数の容量単位が使用されることは、時期や都市を問わずよく見られる事柄である。アッカド王朝が成立したのちバビロニアの諸都市に gur-A-ga-de<sub>3</sub> が導入されたが、それが定着するまでの間は以前の度量衡が並行して使われるという現象が随所で見られた。それゆえファラ文書においても、新来の支配勢力がそれまでの容量単位を駆逐することは十分考えられるが、しかしヴィシカートの見方にならずしも賛同できない理由がいくつかある。

このような容量単位の推移に焦点をあてた研究論文は数少ないのが現状であり、とくにファラ文書内に見られる2種の容量単位の使用について取り上げた研究は、ヴィシカート以後見られない。わずかに、ヴィシカートの見解に対して疑問を呈したエングルンド (R. K. Englund) によるコメントがあるのみである<sup>2)</sup>。ヴィシカートの論文から20年近くを経た今日、初期王朝期エブラ (Ebla) 文書やマリ (Mari) 文書の研究、そしてシリアにおける発掘の成果が続々と報告される昨今、シリア・メソポタミア・イラン地域を縦横に走る交易ネットワークに立脚して当時の社会を読み解こうとする動向が目立つようになった。そのような今日的な視点からヴィシカートの当時の見解をあらためて見直すことは、今後のファラ文書研究に役立つであろう<sup>3)</sup>。

## 1. 容量単位移行説再検討

### 1-1. ヴィシカート説と問題点

ヴィシカートが唱えた移行説の見直しに入る前に、ファラ行政経済文書について簡単に説明しておきたい。

古代都市シュルツパク (Šuruppak) に同定されたファラ遺跡からは、20世紀初頭のドイツ隊発掘により900枚近くが、また、ペンシルヴァニア大学の発掘により約100枚が出土した。それらの文書の内容は、シュルツパクの都市行政文書であるよりは、シュルツパクもその一員であるところの河川輸送ネットワークを管理する行政センターの

保管文書である。一都市の枠を超えた行政文書であるため、本稿では遺跡名に因み「ファラ文書」と呼ぶ。ウルク (Uruk) を筆頭にニップル (Nippur)・アダブ (Adab)・ウンマ (Umma)・ラガシュ (Lagaš) そしてシュルツパクで構成された河川輸送ネットワークについて、ポンポニオ (F. Pomponio) とヴィシカートによる 'Hexapolis league' の名称を転用して「6都市河川輸送ネットワーク」とし、ファラに置かれたこのネットワークの運営拠点を「ファラ行政センター」と呼ぶ (図1)<sup>4)</sup>。

ファラ行政センター保管文書は、'Tablet House' と XIIc, d 地点の2か所から出土した文書から成る。'Tablet House' 出土文書の内訳は、大麦支給・ロバ貸与・耕地割り当て文書・車および木製品貸与文書で、そのほか銀・銅・羊毛・織物・糸・油・食品などの会計文書が各数枚ずつ含まれる。他方 XIIc, d 出土文書では、グルシュ (guruš, 成年男子労働者) 徴集・グルシュ割り振り・職員割り振り記録文書が大半を占めており、したがって XIIc, d にあった役所は人員や労働力の割り振りの監督をおもにおこなっていたと考えられる<sup>5)</sup>。

gur-mah を使用する大麦支給文書はすべてファラ行政センター文書に含まれるもので、粘土板の大半は大型か中型であり、2~3行の小さな粘土板は少ない。その中で大麦を計量するさいに gur-mah を用いたと記す文書は23枚ある。そこには文書の冒頭か末尾に、ときには中途に gur-mah の文字が記される<sup>6)</sup>。さらに gur-mah と記されていなくても gur-mah 容量単位で使用される独特の文字𒄠があることで、gur-mah で計量したと分かる文書が20枚ある<sup>7)</sup>。

もう一方の lid<sub>2</sub>-ga を使用する文書としては、[1]ファラ型不動産売買文書 [2]ペンシルヴァニア大学発掘文書 [3]ドイツ隊発掘文書のうちのファラ行政センター文書に属さない一部が当てはまる<sup>8)</sup>。ヴィシカートは、gur-mah 文書を定期的な大麦支給の記録、lid<sub>2</sub>-ga 文書を小規模な役所からの臨時大麦支給、動物への飼料支出、私的な売買契約記録と見なした。

耕地または家屋・家屋地の売買取引契約を記録した「ファラ型不動産売買契約文書」は今日50枚以上が知られている。これらはおもに耕地と家屋を含む家屋地の売買契約の記録を保管する目的で作成された<sup>9)</sup>。しかしファラ遺跡から出土したことが確かめられる売買文書は13枚のみで、およそ8枚がニップル・キスラ・ウルクから出土しており、さらに5枚はラガシュ出土かと推測される。ニップル: CBS 7273, CBS 6164=PBS 9 3, TMH 5 78, キスラ (Kisura, 現 Abū Hatab): TMH 5 71, 75, ウルク: W 17258=UVB 10 pl. 26b, ZA 72, p. 175, SRJ p. 31, ラガシュ?: RTC 12, 13, 14, 15, TLAT pl.1. そのほかは出土地不明である。このようにファラ遺跡以外から出土した文書の数が多



図1 地図 (ベッセラ 2008: 58 を基に作成)

いため、本稿は出土地に因む従来の名称「ファラ不動産売買文書」を用いない。しかし一貫して同じ書式を用いるという特徴があり、その特徴はファラ遺跡から出土した WF 33 にもっともよく表れているので、ファラとそのほかの都市から出土した粘土板すべてを包括して「『ファラ型』不動産売買契約文書」、略して「ファラ型不動産売買文書」と呼ぶ。

一定の書式で記され、またファラ行政センター文書で言及される人名が数多く存在するため、これまでの研究ではファラ型不動産売買文書はファラ行政センター文書と同じアーカイヴに属する文書と考えられた<sup>10)</sup>。人名のなかにはシュルツパクの都市神スドゥ (<sup>d</sup>Sud<sub>3</sub>) の名を含む例が多く、そのためファラ型不動産売買文書はシュルツパクの都市行政文書の一部とみなされた。先に述べたファラ遺跡以外から発見された文書についても、「なんらかの理由でシュルツパクから他都市へ運ばれた」と説明されたが、その理由はいずれも推測の域を出ないものである。なおペンシルヴァニア大学が発掘した文書の大部分は排水管 (drain pipe) に廃棄された文書であり、そのためであろうか、これらの文書と関連性が指摘される建物址についての発掘報告はない。

ヴィシカートは、ファラ文書では2種の容量単位がほぼ同時期に使用されていたこと、けれどもその使用には一方から他方へ移行する傾向が認められるとし、推移の原因を支配勢力の交替にあるとした (Visicato 1992: 9)。さらに自らの仮説を証明するために、初期王朝期からアッカド期

にかけてバビロニア南部で使用された容量単位の推移を示した (Visicato 1992: 4-7)。

ヴィシカートの論旨はつぎのようなものである。「もともとバビロニア北部で使用された lid<sub>2</sub>-ga がしだいに南下し、ニップルを経てその使用は初期王朝期 III 期初めのファラで止まった。ファラではじきに gur-mah に取って代わられた。その後バビロニア南部では gur-saĝ-ġal<sub>2</sub> が出現しメソポタミア全域に普及した。」<sup>11)</sup>

ヴィシカートの考えの前提には、キシユによる南メソポタミアの支配と衰退があった。ファラにまで及んでいたキシユの支配が、ファラ文書が作成された時期には衰え、その残滓がファラ文書の随所にまだ見られるとし、キシユによりもたらされた lid<sub>2</sub>-ga の使用もまたこの時期には中央の行政センターで gur-mah に取って代わられたが、周辺の小規模な役所では使用がまだ継続していた、と主張した<sup>12)</sup>。

ところがヴィシカートの論文に生じた問題とは次のような点にある。第1に、初期王朝期に年代付けられるキシユ文書には lid<sub>2</sub>-ga が見られない。キシユだけでなくバビロニア北部のどこにも lid<sub>2</sub>-ga は見られないのである (表1)。ファラ文書の時期とほぼ同年代と考えられる文書群が出土したアブ・ツアラビーク (Abū Ṣalābīkh) はファラよりもキシユに近い位置になるが、そこから出土した26枚の行政経済文書のなかに lid<sub>2</sub>-ga を記す文書はない<sup>13)</sup>。またキシユ出土の初期王朝期 IIIb 期の行政経済文書をグレゴワール (J. -P. Gr goire) が出版したが、ここでも GUR しか見られない (AAICAB 1/2 Ashm. 1928-427, 429, 431-2, 1930-

表1 前3千年紀 メソポタミアの容量単位名

	EDII ~ EDIIIa期	EDIIIb期	EDIIIb末~ アッカド期初	アッカド期
マリ		a-gar <sub>3</sub> a-HAR×DIŠ		
アブ・ ツアラビーク		gur gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>		
キシユ			gur gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>	
ニップル		lid <sub>2</sub> -ga	gur gur-GAL.LU gur-mah gur-sa <sub>2</sub> -du <sub>11</sub>	lid <sub>2</sub> -ga gur-A-ga-de <sub>3</sub> <sup>ki</sup> gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>
イシン			gur gur-saĝ	gur gur-saĝ
ファラ		lid <sub>2</sub> -ga gur gur-mah		
キスラ		lid <sub>2</sub> -ga		
アダブ		gur gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>		gur-A-ga-de <sub>3</sub> <sup>ki</sup> gur-mah gur-sa <sub>2</sub> -du <sub>11</sub> gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub> gur-si-sa <sub>2</sub>
ラガシュ		gur gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>	gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>	gur gur-A-ga-de <sub>3</sub> <sup>ki</sup> gur-mah gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub> gurr-saĝ-ĝal <sub>2</sub> -si-sa <sub>2</sub>
ザバラム	gur		gur-lugal gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>	gur gur-A-ga-de <sub>3</sub> <sup>ki</sup> gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub> -dul <sub>3</sub> gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub> -si-sa <sub>2</sub>
ウルク		lid <sub>2</sub> -ga	gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>	
ウル		gur gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>		
スーサ				gur gur-A-ga-de <sub>3</sub> <sup>ki</sup> gur-saĝ-ĝal <sub>2</sub>

330a)。したがっていまのところバビロニア北部で lid<sub>2</sub>-ga が使用されたという事実は証明されないことになる。

第2にファラに及んだキシユの影響と lid<sub>2</sub>-ga の使用とが関連付けられる証拠があるのか、という問題がある。ファラ行政経済文書の中でキシユに言及する文書の数は限られており、その中でも容量単位を記す文書は gur-mah を使用した大麦支給文書 TSS 247 のみである<sup>14)</sup>。また、lid<sub>2</sub>-ga を使用する行政経済文書と不動産売買文書に挙がる人名や耕地名に、キシユとのつながりを示唆する要素は見られない。

このように、キシユの支配とファラで使用された容量単位の間に関連性を認めることはできないのであるが、にもかかわらずヴィシカートが2種の容量単位の同時期並行使用をキシユ勢力の伸張と縮小に結び付けようとした根底には、初期王朝期南メソポタミアに関する当時の一般的見解

の影響があったと思われる。『シュメール王名表』や『トゥンマル碑文』の記述では、シュメールの王権はキシユ→ウルク→ウルへと推移したとされており、現代の研究者は初期王朝期における王権の推移をおおむねこの記述に沿うように理解しようとする。ヴィシカートもまた、容量単位の問題についてこのような見方を適用したのだろう。その上 lid<sub>2</sub>-ga がアッカド語からの借用語であるとしたシヴィル (M. Civil) の見解が (Civil 1976: 76)、アッカド語圏のキシユを lid<sub>2</sub>-ga の発祥の地とするきっかけになったのではないだろうか。

彼は前述の論考の2年後に、ポンボニオと共同してファラ行政経済文書を包括的に論ずる著書を著わした。ここではポンボニオがファラ文書内でキシユに言及する文書すべてを取り上げ、キシユの支配について論じた。しかしポンボニオの論述の内容からも、ファラにおけるキシユの支配

またはその残滓が明確に確かめられるわけではない。距離的に離れた位置にあるキシュ勢力との交流が多少なりとも確認できるのみである (Pomponio et al. 1994: 10-20)。ポンポニオはファラ文書が作成された期間を 30 年間としたが (Pomponio 1983: 145)、少なくとも大麦支給文書は数年程度の期間ではないかと推測され、時間的な経過を論じられるほどの期間ではなかったように思われる。

検討すべき点がもう 1 点ある。それは、2 種の容量単位の間での推移についても根拠が不足している点である。また、文書の分類の結果を時間的経過に結びつける手法も検討し直す必要があり、ヴィシカートが論拠のひとつとして採用した容量単位の構造に関するパウエル (M. A. Powell) の見解も見直さなければならないだろう。この問題については本章第 2 節 2 で取り上げる。

以上挙げた問題点を見直すことにより、ファラ文書内で容量単位が一方から他方へと移行したのではないこと、2 種が同時期に自立した組織で使用されていた可能性が生じてくる。

## 1 - 2. 時間的経過

### - 1 - 同時期並行使用

gur-mah を使用する文書と lid<sub>2</sub>-ga の文書には共通する人名が数例あり、そのため同じ時期に 2 種類の単位が使用されたと言える。lid<sub>2</sub>-ga 文書と gur-mah 文書に共通して現れる人名を一部以下に掲げる。

- |   |   |
|---|---|
| (1) Šubur dub-sar                                 | (lid <sub>2</sub> ) WF 36 rev.ii 8          |
| Šubur dub-sar                                     | (gm) TSS 897 i 3, WF 77 rev.viii 23, 153 iv |
| Šubur ugula dub-sar                               | (gm) WF 25 v 10                             |
| (2) Ur-Nin-irigal <sub>x</sub> šagia <sub>x</sub> | (lid <sub>2</sub> ) Or.44 p.436             |
| Ur-Nin-irigal <sub>x</sub> šagia <sub>x</sub>     | (gm) WF 8 rev. i 1; 25 v 13; 27 iv 1.       |
| (3) UR.UR dub-sar                                 | (lid <sub>2</sub> ) WF 33 iii 2             |
| UR.UR dub-sar-aša <sub>5</sub>                    | (lid <sub>2</sub> ) WF 37 rev. ii 8         |
| UR.UR dub-sar                                     | (gm) WF 25 rev. iv 11                       |
| (4) Utu-ur-sağ simug                              | (lid <sub>2</sub> ) TMH 5, 71 iv 7          |
| Utu-ur-sağ simug                                  | (gm) TSS 8 ii 2                             |

lid<sub>2</sub> : lid<sub>2</sub>-ga 文書 gm : gur-mah 文書

共通人名が確かめられることで同時期に 2 種の容量単位が使われていたことが明らかになるが、時間的推移については確かめる方法はないだろう。

### - 2 - 容量単位の構造 (パウエル説)

ヴィシカートは 1991 年には、lid<sub>2</sub>-ga は gur-mah の半分の量を示す約数であって、それは一つの容量単位とは認められないとのパウエルの見解を引用している (Visicato 1991: 53)。

ファラで用いられた gur-mah は、最小単位 sila<sub>3</sub> が 480 個集まり 1 gur-mah となる。言い換えれば gur-mah が 480 の最小単位 (sila<sub>3</sub>) に分割され、その上には ban<sub>2</sub> と bariga という単位が乗る。それに対し lid<sub>2</sub>-ga はメソポタミアでもっとも普及した gur と同じ 240 sila<sub>3</sub> であった。以下では両者の構造に明らかな相違が見られることを論ずる。

前 3 千年紀半ばまでメソポタミアで主流であった gur は、10 sila<sub>3</sub> → 6 ban<sub>2</sub> (60 sila<sub>3</sub>) → 4 bariga (240 sila<sub>3</sub>) → 1 gur である。標準的な 1 sila<sub>3</sub> はおおよそ 1 ℓ とされ、したがって 240 sila<sub>3</sub> である 1 gur は約 240 ℓ ということになる。gur を基点としてその下部単位をどのように分けるかで、さまざまな種類の容量単位が生まれることになる。メソポタミアの度量衡を包括的に解説したパウエルは、lid<sub>2</sub>-ga の構造はメソポタミアで普及した gur (=240 sila<sub>3</sub>) と同じであったと理解しており、ときには lid<sub>2</sub>-ga を 'Fara gur' とも呼んだ。そしてその構造を 10 sila<sub>3</sub> → 6 ban<sub>2</sub> → 4 bariga → 1 lid<sub>2</sub>-ga とした (cf. Powell 1963: 103, n. 12, 1987: 493-494)。

一方の gur-mah については、240 sila<sub>3</sub> の lid<sub>2</sub>-ga の上にさらにもうひとつの位を設けたのが gur-mah 容量単位とパウエルは考える。つまり従来から使われていた lid<sub>2</sub>-ga を利用して、さらに 2 倍の容量まで増やしたのが gur-mah という容量単位だと解釈したのである。その解釈をパウエルの図式を借りて示すと次のようになる。

$$\begin{array}{cccc}
 & 10 & 6 & 4 \\
 \text{sila}_3 & \rightarrow & \text{ban}_2 & \rightarrow & \text{bariga} & \rightarrow & \text{lid}_2\text{-ga} \\
 & 10 & 6 & 4 & 2 \\
 \text{sila}_3 & \rightarrow & \text{ban}_2 & \rightarrow & \text{bariga} & \rightarrow & \text{gur-mah}
 \end{array}$$

つづいて彼は、ファラでは従来使われていた容量単位 lid<sub>2</sub>-ga を基にして新たな容量単位 gur-mah が考案された、との見解を示した。パウエルの考えは、gur-mah の下部構造と lid<sub>2</sub>-ga のそれは同じ内容であるというものであるが、実際には lid<sub>2</sub>-ga の上に gur-mah が重なる現象は見られない。

☐の文字は、通常の gur など用いられる 1 ban<sub>2</sub> を表示する数字と同じ形であるが、ここでは gur-mah の下部単位として設定された「文字」として使われており、1 gur-mah の半分の量 = 240 sila<sub>3</sub> を表す。ただし、2☐は 1 gur-mah に繰り上がるので、実際のところ ☐のみが見られ、2☐以上はあり得ないはずである。☐の量は 1 gur-mah の

半量であるから 240 sila<sub>3</sub> であり、たしかにそれは一見 1 lid<sub>2</sub>-ga と同じ量であるかのように見える。だからこそパウエルもヴィシカートも、ファラの gur-mah とは lid<sub>2</sub>-ga の構造を基にして作り出されたもので、 $\square$ はこの位置に 1 lid<sub>2</sub>-ga があることを表示する「文字」と考えたのである。2人の考えが正しければ 2 lid<sub>2</sub>-ga は 1 gur-mah であるから、先にも述べたように、2以上の lid<sub>2</sub>-ga は gur-mah に繰り上がらなければならない。しかし lid<sub>2</sub>-ga と gur-mah が同一文書内に現れることは決して見られないのであり、したがって lid<sub>2</sub>-ga から gur-mah へ繰り上がることもない。たとえば CT 50 10 では冒頭に 11 še lid<sub>2</sub>-ga 1 (ban<sub>2</sub>) 5 (sila<sub>3</sub>) とあるが、1 gur-mah = 2 lid<sub>2</sub>-ga であるなら、11 lid<sub>2</sub>-ga は 5 gur-mah 1 lid<sub>2</sub>-ga (=  $\square$ ) と書き換えられなければならない。しかしそのような操作は見られないのである。また、TSS 78 では 21 lid<sub>2</sub>-ga が 5 回、11 lid<sub>2</sub>-ga が 4 回、20 lid<sub>2</sub>-ga と 13 lid<sub>2</sub>-ga がそれぞれ 2 回、12 lid<sub>2</sub>-ga と 8 lid<sub>2</sub>-ga がそれぞれ 1 回記載されているが、これらも gur-mah に置き換えることなく lid<sub>2</sub>-ga で表わされたままになっている。文書末尾の合計も gur-mah に書き換えられた形跡はない。このように lid<sub>2</sub>-ga を用いて計量し記録した場合は、その大麦量は例外なく一貫して lid<sub>2</sub>-ga で記される。それゆえ、lid<sub>2</sub>-ga は gur-mah の下部単位とは考えられない。両者は互いに独立した別個の単位と理解すべきなのである。

アッカド期ニップル文書の ECTJ 162 は、lid<sub>2</sub>-ga と gur の両方を記す文書であり、そこではパンや穀粉などすべて種類の異なる物品の量を記録しているのだが、物品により単位名を使い分けていることから、lid<sub>2</sub>-ga と gur が別種の計量方法であり量る容器が異なるということがわかる。ファラでは lid<sub>2</sub>-ga も gur-mah も大麦と穀粉に用いられたので同じ品物を計量したことになるが、おそらく計量容器は異なる物であった。

## 2. 容量単位と行政組織

### 2-1. 二重構造

ヴィシカートが指摘したように、たしかに gur-mah は 'Tablet House' や XIIc, d 地点 (両地点ともファラ行政センター文書庫) から出土した文書に多く見られ、他方、lid<sub>2</sub>-ga を用いるファラ型不動産売買文書と 30 枚を超す穀物会計文書は、上記以外の地点から出土した文書でありそこには大型文書はない。その事実からヴィシカートは、すでに中央行政政府で廃止された容量単位 lid<sub>2</sub>-ga が周辺の小規模な支所ではまだ使用されていたと推測したのだが、中央行政センターで作成された文書と周辺の小規模な役所のそれとを実際に区別することができるのだろうか。大型であるということはそれだけ記載される人数が多いことを意味し、それゆえ大型文書は中央の行政政府が作成した文書であ

るとすることに異論はないが、大型ではない文書がすなわち周辺文書であるとする論法には同調できない。サイズは記録される内容にも左右されるからである。

ここで、gur-mah 文書の特徴である文書の内容が何枚にもわたり重複することについて触れておきたい。この特徴は明らかにファラがバビロニア南部の交易拠点であったことを反映している。

ヴィシカートの説明を借りればおおよそ次のようなことである (Pomponio et. al. 1994: 21-22)<sup>15)</sup>。定期的大麦支給文書には大型の総計文書とそれに対応する文書 (以下、下部文書) がある。労働現場での直接支給を記録した下部文書から中間集計文書へ、そして最終的な総計文書へと集計されるまでに数段階を経るため、同じ内容の文書が何回も作られることになるというのである。おおよそ [1] 実際の支給現場における記録 (小型文書、標準は表裏各 3 欄、1 欄に数行) → [2] 中間集計記録 (物資輸送管理所・各種職人が所属するオフィスなどの、行政支所ごとの集計記録) → [3] 最終集計 (行政支所を統括する行政センターの総計文書) という段階を経てまとめられた<sup>16)</sup>。ファラ行政センターが各方面から集まる交易ネットワークを統率する行政組織であり、下部組織が多数の「集団」で構成されていたためこのような事態が生じたと言える。穀物支給や耕地割り当てなどはセンターの高位役人から中間責任者を經由して各人に支給されるようになっており、そのため支給記録が段階ごとにまとめられ、結果として部分的に同じ内容のものが何枚も重複して作成された。あたかも中央にある行政センターとその管理下にある下部組織が縦割りに結合しているかのように見えるが、かならずしもそうではない。字形や人名などの表し方に差異が認められるので、総計文書と中間ないしは下部文書を作成する書記との間には書記法の違いが存在したと推測される。そのため文書の内容はさらに複雑かつ重層的にならざるを得なかった。

gur-mah 文書の作成には多数の集団が関わっており、これらの下部組織はある強力な権力に統率されていた。多数の集団とは「氏族 ("clan")」のことである。ファラ行政センター文書のなかで言及回数のもっとも多い人名はアンヌメ (AN-nu-me 247 回) である。ほかに 100 回以上の言及が見られる人名は、シュブル (Šubur 210 回)、ディウトウ (DIUD 188 回)、ハルトゥスドゥ (Har-tu-<sup>d</sup>Sud<sub>3</sub> 159 回)、ウルドゥムジ (Ur-Dumu-zi 149 回)、ナムマフ (Nam-mah 126 回)、スドゥアンズー (<sup>d</sup>Sud<sub>3</sub>-<sup>(d)</sup>Anzu 127 回) であり、その中でもとくにアンヌメは回数が多い。これほど多く言及される人名であるから当時の人々に好まれた人名であったのかと言えばそうでもなく、まずファラ型不動産売買文書には一度も見られない。初期王朝期の資料でも、ニップルの奉納彫像とマラダ (Marad(a)) 出土と推測され

る行政経済文書1枚に見られる程度である（‘Nippur Statue’ (ELTS no.25); AAICAB 1/2 Ashm. 1924-462 ii 2）。言及された回数が多いだけでなく以下のようにさまざまな職名を持つアンヌメがいる。「縮絨工 (azlag<sub>4</sub>)」、「商人 (dam-gar<sub>3</sub>)」、「アフティ (地名) の商人 (dam-gar<sub>3</sub> A.HU.TI<sup>ki</sup>)」、「王妃の館 (e<sub>2</sub>-geme<sub>2</sub>)」、「王妃の館の耕作管理官 (engar e<sub>2</sub>-geme<sub>2</sub>)」、「市民の耕作管理官 (engar dumu-zi)」、「牧人 (na-gada)」、「氏族員 (im-ru)」、「ロバの世話人? (kuš<sub>7</sub>)」、「ロバの世話人? の弁務官 (maškim kuš<sub>7</sub>)」、「醸造人 (lumgi<sub>3</sub>)」、「造船/舟修繕職 (ma<sub>2</sub>-DUN<sub>3</sub>)」、「検地官配下の弁務官 (maškim sa<sub>12</sub>-du<sub>3</sub>)」、「検地官 (sa<sub>12</sub>-du<sub>3</sub>)」、「? (nag-su)」、「広報官長 (gal-niĝir)」、「園丁 (nu-kiri<sub>6</sub>)」、「スッドウ女神の別称? (PA.PA)」、「建築士 (šitim)」、「神殿食料係 (u<sub>2</sub>-a)」、「ギパルの監督 (ugula-KISAL)」、「醸造人監督 (ugula-lumgi<sub>3</sub>)」、「神殿書記官 (umbisag)」。この中で弁務官は一時的な職務であって恒常的な職名ではなく、gal-dam-gar<sub>3</sub> や gal-niĝir の肩書もアンヌメ自身の職名であるよりは「商人長」や「広報官長」のもとでなんらかの仕事に就いたことを意味する。

それではアンヌメという名を持つ者が何人いたのか、この問いに正確に答えるのは困難である。im-ru（「氏族」）の肩書を持つアンヌメがいるので、アンヌメとは氏族の首長の名前と考えられる。すなわちアンヌメが率いる氏族の所属員がさまざまな役割を受け持った結果、多くの肩書を持つアンヌメが文書に記載されたのである。興味深いことに「土器作り (bahar<sub>4</sub>)」、「皮なめし職人 (ašgab)」、「葦加工職人 (ad-kub<sub>4</sub>)」といった手工業者はアンヌメ一族の中にはいなかった。

アッカド期末にニンギルス神、イナンナ女神、ナンシェ女神を奉ずる im-ru(-a)（「氏族」）がニンギルス神殿建設のために徴集されたことが Gudea Statue B に記されている (ETCSL 2. 1. 7 The building of Ningirsu's temple: 374-386)。大規模な建築工事にさいしては、氏族が労働力と建材の提供、そして資金の調達も負担したのだろう。ファラでも大規模な建設事業が進められていた様子が窺えるのだが、おそらくそれに関連してアンヌメは大量の網を支給されている<sup>17)</sup>。特殊なその網の使用方法についてはまだ分かっていないが、水夫や「ディルムン (からの/担当の) 商人 (dam-gar<sub>3</sub> Dilmun)」も同様に網の支給を受けているので、その網は河川輸送のために舟荷にかけられたのではないかと筆者は考える<sup>18)</sup>。ニンギルス神殿建設のために石材や木材が両河の上流から輸送されてきた事実はよく知られており、建設工事をおこなうファラでもまた物資の調達が重要な課題となっていた。ファラ行政センターの中での最大勢力であったアンヌメ一族は、河川輸送の場で物資輸送に従事していたと思われる。

アンヌメならびに言及回数の多い6種の人名は、いずれも耕地割り当て文書に記載されており、したがって彼らはファラ行政センターから耕地を割り当てられ耕作に従事していたことが判明する。割り当て耕地には大麦がすでに播かれた状態であったから、結果として彼らはファラ行政センターから大麦を貸し付けられたことになる。アンヌメ、ハルトゥスドゥ、ウルドゥムジは耕地売買記録には見られないので、彼らは自身の耕地を所有していなかったのだろう。また不動産取引に関与することもなかった。一方、シュブル・ディウトゥ・ナムマフ・スッドウアンズーは耕地売買取引に証人や監督役人として加わり、売主/買主になることも稀にはあった。ファラ行政センター保管文書の中で言及される回数が多いということは、その名を冠する氏族の所属員が多いことにほかならないのであり、したがってアンヌメおよびそのほか6種の人名はみなファラ行政センター所属の有力氏族の首長の名前であると考えられる。各氏族はセンターでさまざまな仕事を割り振られ活動していた。だが彼らを統率した権力についてはまだ不明のままである。

その一方で lid<sub>2</sub>-ga を用いるファラ型不動産売買文書について考えるなら、そのほとんどが均一な書式や用語で記されており、粘土板の形状とサイズもおおよそ統一されているという特徴がある。ファラ行政センターからの定期的大麦支給を記す文書では、記載される人数が100人を超えることはよくあるが、売買文書に記録される人数はたいてい20人前後である。内訳は売主・共同保有者・証人・監督役人・買主・バラ (bala) 職担い手 (後述) である。ファラ以外のニップル・キスラ・ウルクにまでこの書式は及んだのであるから (書式については堀岡 1997 参照)、均一化された書式を共有する書記の一派がバビロニア南部の諸都市に常駐し、その一帯でおこなわれる不動産売買取引を監督したと理解すべきなのである。それゆえ売買文書を作成した書記団が、ファラにおいては中央の行政センターから周辺の役所へ追いやられていたとは到底考えられない。またファラ以外の都市から出土した売買契約文書も一貫して lid<sub>2</sub>-ga を使用するのであるから、広い範囲で度量衡を支配することができる勢力であったと言える。

しかしながら lid<sub>2</sub>-ga を使用する役所は gur-mah を用いるファラ行政センターほど大規模な組織ではなかった。lid<sub>2</sub>-ga 文書の TSS 78 (EDATŠ no. 46) においては、受給者の半数を gal-niĝir 「広報官長」、gal-nagar 「大工職の長」、gal-šitim 「建築士の長」、gal-zadim 「貴石細工職の長」、sa<sub>2</sub>-du<sub>3</sub> 「検地官」などの高位の役人が占め、穀物貯蔵庫の責任者グルグル (Gur<sub>2</sub>gur<sub>2</sub>) もこの中に含まれる。各種の職の長の人名は明記されず職名のみが記載されていることから、彼らはファラではよく知られた人物ということが分

かる。たとえば gal-nîgir とはいえ 1 人しかいない、かなり限定された規模の組織であり、少なくとも、広範囲から交易商人や役人が集結するファラ行政センターとは異質と言えよう。職の長は職人ギルドの統率者であるから、lid<sub>2</sub>ga を使用する役所の中には諸々のギルドを統括するなんらかの行政組織があり、それはファラ行政センターからは自立した存在だったのである。

ただし lid<sub>2</sub>ga 文書に記される人名の一部は gur-mah 文書にも見られるので相互に協力する関係であったと考えられるが、両組織にまたがる高位の役人はいなかったのも事実である。

以上見てきたように、gur-mah または lid<sub>2</sub>ga を用いる組織は同時期に互いに自立した関係であったと見るべきである。

## 2-2. ファラ行政センター

### - 1 - 書記法 mah/mah<sub>2</sub>

ファラ行政センターには多数の氏族が所属し働いていただけでなく、相当数の異国人もセンターに所属していた。そのような状況の中でセンターの秩序を保つためには強固な統制力がなくてはならない。しかしいまのところファラに「王 (lugal/en)」がいた証拠は無く、ファラ遺跡の古代名とされるシュルツパクの支配者についても何も分かっていない。

支配者の名前や実態は分からないとしても、大規模灌漑農耕と遠隔地交易を運営するために所属員と大量の労働集団を組織化する能力を備えた支配勢力は存在したに違なく、その一つの表れが、gur-mah 文書の中に認められる 2 つの書記法の対立と言えよう。

大麦支給とロバ貸与の総計文書の中には、次のような文字の置き換えがおこなわれていた。「偉大な」の意味で人名要素として使われる mah の語を、ときに AL (= mah<sub>2</sub>) の文字で置き換えるもので、一部の総計文書で確認されるが下部文書では見られない。

mah/mah<sub>2</sub> の語を含む人名を記す総計文書+下部文書グループを以下に記す。(総計文書、下線 = mah<sub>2</sub>(AL))

#### [1] 大麦支給文書

WF 76	Nam-mah <sub>2</sub> i 8; 10; 18; ii 15, rev. ii 10'.
WF 106	Nam-mah i 5; iii 6.
TSS 570	(mah なし)
TSS 58	(mah なし)

#### [2] ロバ貸与文書

WF 22 + WF 25	Hur-saĝ-mah-še <sub>3</sub> WF 22 iii 17; rev. i 3. Nam-mah WF 22 ix 16, Nam-mah <sub>2</sub> WF 25 ii 13, v 6, vi 19, viii 9, rev. iii 12, v 7. Sud <sub>3</sub> -a <sub>2</sub> -mah <sub>2</sub> WF 25 rev. i 19, ii 16, iv 16.
---------------	--

Me-mah-nu-sa <sub>2</sub> WF 25	ii 6, rev. v 11. (mah なし)
NTSS 169	
NTSS 496	Hur-saĝ-mah-še <sub>3</sub> iv 8'. Nam-mah rev. iv 8'.
TSS 64	Nam-mah i 4.
TSS 107	(mah なし)
WF 9	Nam-mah iv 14; viii 14. Utu-a <sub>2</sub> -mah <sub>2</sub> rev. v 8.
WF 13	Nam-mah rev. i 4.
NTSS 205	Nam-mah iii 5.
TSS 1	Nam-mah <sub>2</sub> rev. v 13.
WF 7	Sud <sub>3</sub> -a <sub>2</sub> -mah rev. vi 2. Hur-saĝ-mah-še <sub>3</sub> rev. vi 2.
TSS 14	Sud <sub>3</sub> -a <sub>2</sub> -mah rev. iv 11. Hur-saĝ-mah-še <sub>3</sub> rev. iv 13.
TSS 100	Utu-a <sub>2</sub> -mah iii 4.

大麦支給総計文書 WF 76 とロバ貸与総計文書 TSS 1, WF 9, 22, 25 では概して mah<sub>2</sub> を用いる<sup>18)</sup>。下部文書には mah<sub>2</sub> が使われないのであるから、下部文書を集計するさいに mah を mah<sub>2</sub> へと意識的に置き換えたと見て間違いはないだろう。ただし総計文書においても WF 22+25 や WF 9 のように 2 通りの書き方 (mah/mah<sub>2</sub>) が混在する可能性があることについては、文書を作成する現場の書記が 1 人ではなく中間集計の書記が補助についている可能性が考えられる。このような例外については今後総計文書の人名に追記される上級監督者名ないしは所属先名称を分類整理し、支給経路を明らかにすることで書記系統の違いを明確にすることができるだろう。しかしむしろここで注目すべきは、中間と下部文書には mah<sub>2</sub> が見られないことである。

gur-mah 文書の中には 2 種の書記法が存在したことをこれまで示してきたが、このような状況はおそらく多数のさまざまな支給現場で記録する書記と、行政センターの中で集計に従事する書記との間の相違から生じたものと考えられる。同じようにファラ出土の神名リストにも mah<sub>2</sub> を用いる書法が見られ、ウルク系の神名をリストアップしたその「大型神名表」(SF 1) は、神名 Nin-mah を Nin-mah<sub>2</sub> と書く (SF 1 vi 21)<sup>19)</sup>。したがって mah<sub>2</sub> を用いる総計文書はウルク系の書記が記したと考えられる<sup>20)</sup>。

パウエルは gur-mah を 'greater gur' 「より大きなグル」としたが、ポンポニオは反対に、gur-mah の柁は後世 (ウル第 3 王朝期) のそれより容量が小さいと言う (cf. Powell 1989: 497-498; Pomponio and Vicicato 1994: n. 4)。後者が正しければ、mah は柁の大きさを指す語ではないことになる。また gur-mah という単位名称は初期王朝期にはファラ以外では使用されなかったが、アッカド期になる

とアダブで使われるようになる。ただしアダブのそれは240 sila<sub>3</sub>である。480 sila<sub>3</sub>の gur-mah とは内容が異なるにもかかわらずファラと同じ名称が使われたのであるか (cf. Krebernik 1986: 165)、gur-mah という名称は480 sila<sub>3</sub>で構成された容量単位を特定するのではなく、gur を形容する mah の語になんらかの意味があると思われる。後述するように、gur-mah 文書の中では人名要素としての mah が mah<sub>2</sub> に置き換えられる例があることから、文字 MAH に重要な意味合いがあったと言えるだろう。つまり「偉大な (力)」を視覚的に誇示する文字 MAH ⇨ を快しとしない勢力が、MAH を避けて AL (= mah<sub>2</sub>) ⇨ を用いたと筆者は理解する。

MAH の文字を象徴的に用いる勢力と MAH に対抗する勢力との対立的な構図が、gur-mah 文書内で2つの書記法の存在を生み出したのではないだろうか。2つの書記法の所属先を解明することがファラで播種用大麦を支出した穀物貯蔵庫の所有主を知ることにつながり、ファラ行政センターを支配した勢力を追跡調査するさいには格好の手掛かりにもなるだろう。

ファラでは5基の穀物貯蔵庫の名称が文書資料から知られる: ḡanun-mah, ḡanun Gur<sub>2</sub>-gur<sub>2</sub>, ḡanun ŠEŠ.KI-na, ḡanun Me-pa-e<sub>3</sub>, ḡanun en/ IB。このうち ḡanun-mah から5400 ℓ、名称不明の ḡanun から2880 ℓ、グルグル (人名 Gur<sub>2</sub>-gur<sub>2</sub>) が管理する ḡanun から1800 ℓ の大麦が、およそ243ヘクタールの割り当て耕地の播種用に支出された (WF 55 =EDATŠ no. 59)<sup>20)</sup>。ほかの ḡanun に言及する文書はいまのところ発見されていないが、おそらく ḡanun-mah がファラ行政センターのもっとも主要な穀物貯蔵庫である。

ḡanun-mah を字義通りに解釈すれば「大きな穀物貯蔵庫」となるが、mah の語は単に大きさだけを意味しているのだろうか。mah を含む神殿名は地母神の神殿である場合が多い。mah の意味を考えるさいにただちに思い浮かぶのが、初期王朝期 IIIb 期末にアダブの主要な神殿が E<sub>2</sub>-SAR から E<sub>2</sub>-mah へと交替した出来事である (Yang 1989: 270)。アダブの都市支配者 (GAR-ensi<sub>2</sub>) エイギニムパエ (E<sub>2</sub>-igi-nim-pa-e<sub>3</sub>) がディンギルマフ女神 (Dingir-mah=<sup>4</sup>Nin-mah=<sup>4</sup>Nin-tu=<sup>4</sup>Nin-hur-saḡ) のためにエマフ神殿を建立したのである (Frayne 2008: EI.1.7; 1.7.2)。アダブではエサル神殿 (=イナンナ神殿) に対して複数の奉納碑文が作成された時期があったのだが (Frayne 2008: EI. 1.2.1; 1.3; 1.4; 1.5.1)、エイギニムパエ治世以降はエサル神殿への奉納碑文は見られなくなった。E<sub>2</sub>-mah という神殿名は地母神の威容を讃える名称であり、ここでの mah は単に大きさだけを表すのではなく「偉大な権威」を表現しているように思われる。E<sub>2</sub>-mah 神殿の名称は前1千年紀まで継続して使われ、しかもギルス (Girsu)、ウンマ、ニツブ

ル、バビロン (Babylon)、アッシュル (Aššur) さらにはディヤラ (Diyala) 流域にも置かれていたようで、多くの都市に建てられたことは確かである。mah の意味を mah<sub>2</sub> で表した可能性のある神殿名は、バビロンの東側にあるアダド (<sup>4</sup>Adad) 神の E<sub>2</sub>-AL-ti-la で、ジョージ (A. George) が言うようにこれを E<sub>2</sub>-mah<sub>2</sub>-ti-la と読めるなら、おそらくマルドゥク神 (<sup>4</sup>Marduk) やナブ神 (<sup>4</sup>Nabú) の神殿 E<sub>2</sub>-mah-ti-la と同じく「生命をもたらす栄えある神殿」を意味し、mah ではなく mah<sub>2</sub> を用いた神殿名の唯一の例と言える (George 1993: 66, 119-121)<sup>21)</sup>。

ファラの「大きな穀物貯蔵庫」の名称もまた都市の主要な穀物貯蔵庫といった意味合いだけではなく、地母神系の祭祀ネットワークが所有する穀物貯蔵庫を表していると推測される。シュルツパクの都市神スドゥは、ニンフルサグ女神の祭祀センターとして知られるケシュからやってきた可能性が指摘されている。ニンフルサグの別名はニンマフであるから、ニンマフがスドゥ女神に形を変えてシュルツパクに勧請され<sup>22)</sup>、それによりシュルツパク市の穀物貯蔵庫も ḡanun-mah と名付けられ、「6都市河川輸送ネットワーク」の一員としてシュルツパク市はネットワークへ播種用大麦を提供 (または貸し付け) したとは考えられないだろうか。

## - 2 - 遠隔地交易

交易ネットワークの中では共通の容量単位を使わなければならない。したがってファラ交易センターの gur-mah は、おそらくネットワークに所属する中継地や諸都市に通用する容量単位であったはずだ。さらに上記 WF 55 で明らかのように、所属員の割り当て地に支出される播種用大麦はおもに ḡanun-mah に貯蔵された大麦であるから、交易センターの書記は ḡanun-mah とも共通する容量単位を使用しなければならなかったろう。

シリアの北西部に位置する都市エブラからファラ出土職名リストと同種の職名リスト、さらにウルクを筆頭に「6都市輸送ネットワーク」に所属する都市名を記した語彙リストが発見されている (Visicato 1989: 169)。またメソポタミアからシリア北西部までを包含した都市名リストもエブラから発見された。それらによりシリア～ファラとの間の交易関係が確かめられ、シリアと南メソポタミアの間には中継地を伝いながらの交易/輸送ネットワークが築かれていたことが確かめられるだろう (cf. Frayne 1992)。エブラ出土の15,000枚ほどの文書の中では、一部に MAH と MAH<sub>2</sub> の使い分けが見られる。たとえば「歌い手 (nar)」はキシユやそのほかからエブラに多数やってくるが、ときに「歌い手の長」nar-mah を nar-mah<sub>2</sub> と記す例があり、その場合 mah<sub>2</sub> を用いるのはマリの「歌い手」に限られる<sup>23)</sup>。

mah<sub>2</sub>を用いる一群の文書はマリとの取引を扱う記録を多く含み、そのためエブラが取引相手とする都市の中でも、とくにマリを担当する部署では mah ではなく mah<sub>2</sub>(AL)が採用されたと推測される。このようなエブラ・マリ間の関係は、遠く離れたフェラの地での状況が交易ネットワークを辿り波状的に伝えられたと考えられないだろうか。

マリからは初期王朝期に年代付けられる文書が50枚以上出土しており、a-gar<sub>3</sub>と a-HAR × DIŠ という2種の穀物容量単位が使われていたことが分かる<sup>24)</sup>。a-gar<sub>3</sub>は gur のさらに上の単位で、gur の直下の位はすくなくとも7 bariga まであったとシャルパンが推測しており (Charpin 1987: 91-92)、今後文書史料が増えれば 1 gur = 8 bariga が現れる余地はあるだろう。

以上の考察から、gur-mah はシリアと南メソポタミアの間を結ぶ交易ネットワークが、遠隔地同士でも通用することを目的として作りだした容量単位と考えられるだろう。

## 2-3. lid<sub>2</sub>-ga の普及範囲

### - 1 - エンリル神

lid<sub>2</sub>-ga の使用は後述するようにニップル周辺の狭い範囲内であった。本節ではその理由を、エンリル神 (En-lil<sub>x</sub>) が lid<sub>2</sub>-ga を制定したと詠う儀礼歌の内容に基づき考えてみたい。この讃歌は古バビロニア期の作品であるが、情報量に限りのある前3千年紀半ばについて調べるにあたり、あらゆる史料を参考にする必要はある。

シヴィルが出版したこのエンリル神へ捧げた儀礼歌の中で「物差しと秤を持つ商人」と表現されるエンリル神は、「lid<sub>2</sub>-ga 容器」すなわち lid<sub>2</sub>-ga と呼ばれる容量単位を、新規に?制定したとして描かれる。けれども lid<sub>2</sub>-ga 単位で計量する容器は本来ウトゥ神 (Utu) が管理するものであったと推測できる記述もあるので、以下にシヴィルによる該当箇所と、シヴィル翻訳を参考にしておこなった筆者による翻訳を挙げ、論じてゆく。

- 23) a-a<sup>4</sup>mu-ul-lil<sub>2</sub> li-id<sub>2</sub>-da mah mu-e-tum<sub>2</sub> saġ-e ba-e-de<sub>2</sub>  
 24) u<sub>3</sub>-mu-un ka-na-aġ<sub>2</sub>-ġa<sub>2</sub> <sup>618</sup>ba-ri<sub>2</sub>-ga mu-e-tum<sub>2</sub> gi-gur bal-še<sub>3</sub> me-a  
 25) a-a<sup>4</sup>mu-ul-lil<sub>2</sub> saġ-zi saġ-lul-la šu-bal ba-ni-ib-ak  
 23) 「父なるエンリル神よ、(あなたは)偉大な lidga 容器をもたらしました。・・・」  
 24) 「国土の主人よ、(あなたは) bariga 容器をもたらしました。・・・」  
 25) 「父なるエンリル神よ、(あなたは)正規の「利益」を偽り?の「利益」(に変えて)取引を行いました。」<sup>25)</sup>

シヴィル訳では23行目後半の saġ-e ba-e-de<sub>2</sub> を "...you

pour people into the basket」、24行目後半の gi-gur bal-še<sub>3</sub> me-a を "...you carry the baskets for trade" としているが、23、24行目ともに前半と後半の意味が繋がらない印象を受ける。23行目後半の意味はとりにくい、「エンリル神が新たに lid<sub>2</sub>-ga 計量容器をもたらしたので「利益」というものが作りだされた」。24行目は「エンリル神が新たに bariga 計量容器をもたらしたので、それまで計量に使用した「バスケット容器」はどこかへ遣られてしまった。」としたほうが前後の意味が通じるのではないだろうか<sup>26)</sup>。また23行目最後の語 de<sub>2</sub> についても、シヴィルのように šapaku; šaqû "to pour" の意味で解釈するよりも patāqu "to shape, create" を選択するほうが妥当と思われる。

25行目の šu-bal — ak については、この語が商取引に用いられる用語であり、そしてこの語は10行目のエンリル神を「商人 (dam-gar<sub>3</sub>)」とする形容と関連づけられるとシヴィルは説明する<sup>27)</sup>。

- 10) <sup>4</sup>mu-ul-lil<sub>2</sub> dam-gar<sub>3</sub>-ra ki-dagal-la  
 11) u<sub>3</sub>-mu-un mu-rin<sub>2</sub>-na-ni saġ ma-al-la  
 12) u<sub>3</sub>-mu-un na-na ga-NUNUZ am<sub>3</sub>-da-ma-al-la  
 10) 「エンリル神は広い世界の商人であります。」  
 11) 「君主の、その(手に持つ)物差しは追加分を加え」  
 12) 「君主の、その秤に卵型分銅を置きました。」<sup>28)</sup>

儀礼歌のためいわゆる「女性言葉エメサル」で書かれているが、標準的な語法に直せば11行目は en giš-erin<sub>2</sub>-na-ni saġ ġal<sub>2</sub>-la となる。11、12行目の訳はシヴィル訳を修正し斜体で表した。シヴィル訳では11行目は「君主の物差しは気前よく量る」とあり、また12行目の ga-NUNUZ をシヴィルは訳さなかった。11、12行目の内容は10行目の「商人」に呼応する内容でありこの2行は取引に使われる計量器に言及しているのであるから、ga-NUNUZ とは「卵」の意味を持つ NUNUZ の語義に関連した意味を持つ計量器具であると想定し、「卵のような形をした」分銅の1種と推測した。次につづく13行目の表現は、その分銅がそれまでの「住民」にとって異質な分銅であったことを連想させる。

- 13) u<sub>3</sub>-mu-un ki-tuš-a-ni uru<sub>2</sub>-ir-ir.  
 「君主は、その御座からウトゥ神の都市を蹂躪します」。

13行目をシヴィルは「彼の御座(から)都市を略奪する」と訳し、エンリル神は居ながらにして「略奪する」すなわち町中の品物を買上げることができていることを表すと説明した (Civil 1976: 75)。エメサルでは uru<sub>2</sub> が都市を意味するというのだが、都市を意味する文字 URU<sub>2</sub> のなか

に太陽（神）UDの文字を入れたURU × UD (=URU<sub>2</sub>)<sup>㊦</sup>は、「都市」を意味する普通名詞URUとはやはり意味合いが異なるものとして解釈すべきである。文字URU<sub>2</sub>はとくにウトゥ神を祀る都市を表しているはずである。

ウトゥ神は本来商業活動を支配する神であったと推測される表現が『ヘンドゥルサグ神 (Hendur-sag) 讃歌』の中に見られる。シュメール・パンテオンの中で「秤を持つ」と形容される神はそれほど例がある訳ではないが、シヴィルは『ヘンドゥルサグ神讃歌』の中で、ウトゥ神が象徴的な道具として「物差し」を手を持つと解釈した。しかし実際にはその箇所では「手に持つ」とは書かれていない。「ウトゥ神は物差しを使って運命を定める」とある。32行目から37行目の記述では、ヘンドゥルサグ神とは人々の取引の内容をウトゥ神に伝え、ウトゥ神が決定した取引（値段）を再び当事者に伝える役割を持ち、一方のウトゥ神とは、取引の内容をヘンドゥルサグ神から聞き適正な値段を決定する神であった、と読みとることができる。したがってウトゥ神もここでは取引を司る神として認識されていたと推測される<sup>29)</sup>。

『エンリル神儀礼歌』の11行目「エンリル神はウトゥ神の都市を略奪する」の一文はつぎのように理解されるだろう。標準的な価格にすこしでも有利になる利益を上乗せしようとするのが商人だとすれば、エンリル神はウトゥ神により決定された「適正価格」を操作しそれまで以上の利益を上乗せする能力を備えた神であり、それこそがシュメール・パンテオンの最高神の証であると『儀礼歌』は讃えるのである。本来商取引を支配するのはウトゥ神であるにもかかわらず、その権能がエンリル神に奪われたと表現しているかのようである。そのように読み取る根拠は、11、12行目を物差しや秤を操作する行為と解釈し、それに基づき25行目の saĝ-zi saĝ-lul-la šu-bal ba-ni-ib-ak を「正規の利益を（上乗せすべきところを）、（エンリル神の威力で）高額な利益（を加えた値段）で取引した」と筆者が解釈したところにある<sup>30)</sup>。エンリル神のおかげでニップルの商人たちは富み栄えることができた『エンリル神儀礼歌』は讃美しているのであろう。言い換えれば lid<sub>2</sub>-ga 容器の使用が途絶えた時が、ニップルの交易商人を保護した王権の衰弱した時であったのだろう。

都市名・地名を表す限定詞 ki を付加した URU × UD<sup>㊦</sup>であれば、ファラ型不動産売買文書でバラ職を担うエンシの1人マシュスドゥウが治める都市として知られる。彼は家屋売買文書の1つでバラ職の項に「マシュスドゥウ、URU × UD<sup>㊦</sup>のエンシ」と記される<sup>31)</sup>。バラ職はニップルのエンリル神殿に奉仕する義務であるが、その立場はエンリル神へ服従する者と言ってよいだろう。ここで取り上げた「エンリル神儀礼歌」では、URU × UD<sup>㊦</sup>はエンリル神

に征服され都市神であったウトゥは取引の主導権を奪われたかのように表現されているのであるから、lid<sub>2</sub>-ga の使用がニップルで消滅したあと再びウトゥ神の復権があったかどうかとも探る必要があるだろう。なぜなら、そうすることにより、交易ネットワークの盛衰と祭祀ネットワークのそれが連動するかいなかを知る手助けとなるからである。

マシュスドゥウをバラ職として記す売買文書は8枚あるが、出土地が判明しているのはそのうちの2枚のみで、しかもウルクとニップルから出土したものである<sup>32)</sup>。ウェステンホルツは URU × UD<sup>㊦</sup> の位置をニップル近くと推測するが (Westenholz 1998: 62 n.258)、現状ではまだその位置を決定することはできない。

## － 2 － グラ女神と lid<sub>2</sub>-ga

ニップルでは初期王朝期 IIIb 期のニップル出土ファラ型売買文書と、初期王朝期末からアッカド期シャル・カリ・シャリ王治世時（前 2250 年ころ）にかけての行政経済文書で lid<sub>2</sub>-ga が使われた<sup>33)</sup>。ヴィシカート論文にイシンについての言及はなかったが、いわゆる ‘Ancient kudurrus’ のなかに lid<sub>2</sub>-ga を用いるイシン出土の初期王朝期 IIIb 期耕地売買取引記録がある。石製記念碑に記された ‘Chicago Stone’ (ELTS no. 14) と ‘Baltimore Stone’ (ELTS no. 15) である。その後 1992 年にシュタインケラー (P. Steinkeller) が 20 点ほど初期王朝期イシン文書を発表した<sup>34)</sup>。しかしここでは lid<sub>2</sub>-ga ではなく gur が用いられているので、イシンで lid<sub>2</sub>-ga が使用された期間は非常に短いと言わざるを得ない。

以上挙げた lid<sub>2</sub>-ga 使用の地域と期間をまとめれば、ファラ不動産売買文書が出土したファラ・キスラ・ニップル・ウルクと、イシンの不動産売買を記した石製記念碑が、初期王朝期 IIIb 期に位置づけられ、その後継続して lid<sub>2</sub>-ga を使用したのはニップルのみであり、そこでは lid<sub>2</sub>-ga 使用は 100 年以上も続いた。ニップルでのみ lid<sub>2</sub>-ga の使用が続いた理由についてはなお精査が必要であるが、前節でみたように lid<sub>2</sub>-ga を制定したエンリル神へ捧げた讃歌に、lid<sub>2</sub>-ga を管理できる神は唯一エンリル神のみであり、その使用は聖都ニップルにおいてだけであるという宣言と関連があるのだろう。

初期王朝期 IIIb 期半ばに lid<sub>2</sub>-ga で結ばれる 5 都市シュルツパク・キスラ・ニップル・イシン・ウルクには、後世の文書史料から知られるもうひとつの共通項がある。それはグラ (G<sub>2</sub>-la/G<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>) をはじめとする女神たちとその配偶神である。古バビロニア期の神名リストに ‘Nin-Isin-na - ‘Nin-kar-ra-ak - ‘G<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> と並ぶが、それぞれイシン・ウルク・ニップルの主要な女神であり、互いに同一視され、またニムルタ神ないしはのちにニムルタ神と習合した神々を配偶神に持つ (Edzard 2000: 387; Frankena 1957-

1971: 695)。イシンのニンイシナ女神はイシンのエガルマフ神殿 ( $E_2\text{-gal-mah}$ ) に住むグラ女神と同一視され、それぞれの配偶神パビルサグ神 ( $^d\text{Pa-bil}_2\text{-sa}_2$ ) とニヌルタ神も同一視された (Krebernik 2003-2004: 162)。ウルクではウル第3王朝期から古バビロニア期にかけてニンイシナ女神の祭祀が行われていた。キスラは都市神がニヌルタ神であるから、配偶神もおそらくグラ女神と習合する女神であろう。

ファラに関連するグラ女神の資料としては、家屋売買の証人リストに見られるグラ神殿のグドゥ ( $\text{gudu}_1$ ) 神官ウルエンリル ( $\text{Ur-}^d\text{En-lil}_x$ ) が挙げられる<sup>35)</sup>。この人名はエンリル神殿から派遣された役人であると思われるが、そのような者がグラ女神のグドゥ神官を務める場合どのような役割であるのかは不明であり、また神名グラを人名要素とする4種の名前：アマルグラ ( $\text{Amar-}^d\text{Gu}_2\text{-la}_2$ )・ガングラ ( $\text{GAN-}^d\text{Gu}_2\text{-la}_2$ )・グラアンドゥル ( $^d\text{Gu}_2\text{-la}_2\text{-an-dul}_3$ )・ウルグラ ( $\text{Ur-}^d\text{Gu}_2\text{-la}_2$ ) がファラ文書に散見されるが、グラ神殿の所属員と分かる者はいない。明らかなのは、ウルグラがファラの地で都市支配者 (ファラの  $\text{GAR-ensi}_2$  か?) へ羊・山羊を食用として納めているので (WF 126 iii 3-4)、ファラで山羊・羊を飼養している者であるだろう。グラアンドゥルには「皮なめし職人 ( $\text{ašgab}$ )」の肩書があるので (TLAT rev. i 4-5)、グラ女神につながる2人は山羊・羊飼養と経営のために食糧や飼料用の耕地を所有していたと考えられる。ガングラは家屋売主として (NVN 10 82 iii 3, 83 ii 8)、アマルグラはファラ出土が確かな耕地売買文書で書記の肩書を持つ証人として参加している (WF 33 rev. i 6-7)。

古バビロニア期イシんにストゥの神殿  $E_2\text{-dim-gal-anna}$  があったとの記録があり、フレインによればシュルツパクとイシンとはイシニートゥム運河で繋がっていたということである (Frayne 1992: 40-41)<sup>36)</sup>。この運河はキスラまで伸びて、そこからユーフラテス河へ再び合流した。ユーフラテス河はウルクへと流れる。すなわち  $\text{lid}_2\text{-ga}$  の使用はイシニートゥム運河で連結されると言えよう。

$\text{lid}_2\text{-ga}$  を用いたファラ型不動産売買文書の均一な書式からは、諸都市にまたがる強力な統率が窺える。ほとんどの文書の末尾にはバラ職を担ったエンシの名が記載されているのだが、ウル第3王朝期においてはニップルの聖域エクルの維持に努めるバラ義務をウル王室に服属する諸都市のエンシたちが輪番制で務めたのであるから、バラ職エンシの監督下でおこなわれたファラの不動産売買取引もまた、エクル聖域維持に貢献するための取引であったに違いない<sup>37)</sup>。ファラ文書の時代のバラ職を交替で務めたエンシたちが、彼らはおそらくグラ女神の祭祀で連結するネットワークに所属していたと想定される<sup>38)</sup>。

グラとニヌルタ神の神殿が置かれたニップル市内と、運河で隔てられた北東部分にあるエクル聖域との間の関係をどのように理解すべきであるのか。またファラ文書に基づいてエンリル神とグラ女神との関係を説明するのも同様に困難であるが、ウル第3王朝期のウンマ文書から重要な情報が得られる。ウンマでは基本的にウル王室が所有する直営地をいくつかの耕作集団が受け持っていた。耕作集団は区域ごとに形成されており、集団には市区名が付加されるのだが、そのような状況のなかで、唯一グラ神殿耕作集団だけが神殿に所属する集団であった。ウンマのグラ女神は毎年ニップルを訪問するのが習わしであったというが、ウンマには都市神シャラをはじめ各市区の主神やそのほかの神が祀られるが、『ニップル詣で』はグラ女神に限定される (cf. 前田 2006: 41-44)。

グラ女神の神殿が耕作集団と耕作牛を所有していたのであるから、この神殿は自身の耕地も所有していたであろう。ウル王室の強権のもと土地私有が禁止された状況のなかでもやはり例外はあったと言える。そしてファラにおいても、支配権力の許に束ねられる氏族集団と、小規模ながら自身の耕地を所有する多数の氏族が共存しており、前者は支配者から播種と耕地を借り受けて耕作し、後者は所有地の収穫物をニップルの聖域維持のために奉納する義務で、強権と平和的に共存できたのではないだろうか。

ファラ不動産売買文書に代表される  $\text{lid}_2\text{-ga}$  使用の役所は、小規模な土地私有者とニップルとをつなぐ組織でもあった。耕地の売買取引を管理するのであるから、収穫物の管理も行っていただろう。それはすべてニップルの神殿維持のためであった。ニップルを取り巻く地域に根差したこの組織は、「耕地経営管理センター」と呼ぶべきものである。他方  $\text{gur-mah}$  を使用するファラ行政センターは大所帯の氏族を多数従える強力な支配者であり、遠隔地交易を指揮していたと考えられるが、この支配権がどこの都市に帰属するのは、今後の課題としたい。

## 結語

ファラ文書で使用された  $\text{gur-mah}$  と  $\text{lid}_2\text{-ga}$  はいずれも自立した組織で使用されたのであり、一方が他方を駆逐するといった現象は認められない。ウル第3王朝期と対比させてみるならば、ファラ行政センターはウル王室と、耕地経営管理センターは小規模な耕地所有者の集合体にそれぞれ対応することになるだろう。

これまでの考察により、 $\text{lid}_2\text{-ga}$  はバビロニア中央部という狭い領域内に位置するファラ・イシン・ニップル・キスラと、さらに南のウルクで使用されたことが本稿の考察で明らかとなり、それに対し  $\text{gur-mah}$  はバビロニア南部からシリアにまで伸びる交易ネットワーク内で通用したとの

見方を提示することができた。ファラ文書における2種の容量単位の並行使用は、おそらくバビロニア穀倉地帯に定着し不動産売買取引を管理した土地所有者の勢力と、シリア・メソポタミア間をつなぐ交易ネットワークを支配する勢力がファラで共存した状況を映し出しているのである。王権の交替により新たに度量衡が制定されることはもちろんあるが、少なくともファラ文書での並行使用は、一方の権威から他方のそれへと移行する過程を表してはいない。

gur-mah 勢力 (= ポンポニオとヴィシカートによる 'Hexapolis league') はファラ文書の時期には mah<sub>2</sub> (AL) を用いる勢力の支配下に置かれていた様子であり、lid<sub>2</sub>-ga 勢力はやがてファラから撤退しニップル内に収縮せざるを得なかった。その頃 gur-sag-gal<sub>2</sub> の使用が南からバビロニア北部まで普及したが、その一方で、ニップルにおいては gur-sag-gal<sub>2</sub> が浸透しなかった。その理由はどこにあるのだろうか。gur-sag-gal<sub>2</sub> がラガシュやスーサなど『シュメール王名表』に記載されない都市で優勢であったことと併せて、今後の研究課題としたい。

穀物に使われる容量単位名称の並行使用は、ファラ文書だけでなく各地で見られることであり、その背景にはその時活発に活動した交易ネットワークの存在がある。数あるネットワークのそれぞれの経路について知るには、祭祀ネットワークの追跡と並んで (e.g. 小泉 2001: 133)、本稿で扱ったような容量単位の構造の比較も十分役立つと思われる。

#### 註

- 1) 1902 ~ 1903 年にドイツ隊が発掘した各文書の内容については Krebernik 1998: 337-377 を、またアメリカ・ペンシルヴァニア大学発掘文書については Martin et al. 2001: 25-74 を見よ。
- 2) Martin et al. 2001 についてのエンゲルンドによる Critical Review から該当箇所を引用する。"Whether or not the gur-mah of 8 bariga (480 sila<sub>3</sub>) was favored in grain accounts recording rations and seed as opposed to a lid<sub>2</sub>-ga used in private transactions and irregular barley distributions, including the UM Fara texts published here (see p.35 with reference to EDAT<sub>5</sub>, p.183) is an open question. Administrative witnesses to such a practice in the Fara period are very sparing, and it seems contradicted by the author's own references to seed allocations in TSS 160, 209, 210 and 684 (his EDAT<sub>5</sub> nos. 52-55)." (Englund 2002: 126). UM Fara texts = ペンシルヴァニア大学博物館所蔵ファラ出土粘土板文書。
- 3) ファラ文書の年代を筆者は初期王朝期 IIIb 期とする (cf. 堀岡 1997, 2006)。
- 4) ドイツ隊が発掘したさいにファラ文書の主要部分が出土した 'Tablet House' と XIIc,d 地点の建物跡 2 箇所をヴィシカートが 'Hexapolis league' の行政センターとしており、またここに置かれたウルクが宗主となる 'Hexapolis league' の拠点を、シュルツパクの都市支配者がその都市行政からは離れて運営したという (Martin et al. 2001: 124)。ファラ遺跡からはそのほか散発的に文書が出土したがまとまった文書庫は見当たらない (Martin et al. 2001: 19-74)。

- 5) ファラ行政経済文書のうちドイツ隊が発掘したおよそ 900 枚の内容概略と内訳については Krebernik 1998: 337-377; Pomponio and Visicato 1994: 3-9 を見よ。ファラ遺跡で最も多くの文書が出土した地点を 'Tablet House' と呼ぶ。位置は Martin 1988: Fig.5 参照。各地点から出土した文書の数については Martin 1988: Tab. 16 参照。
- 6) gur-mah 文書: TSS 58, 65, 261, 400, 442, 480, 667, 837, WF 41, 55, 61, 62, 67-69, 70, 75, 83, 85, 88, 90, 91.
- 7)  を本稿では  で表記した。TSS 7, 86, 130, 150, 158, 164, 237, NTS<sub>5</sub> 569, WF 65, 66, 71, 72, 74, 76, 77, 78, 84, 86, 87, 107. そのほか単位を記した箇所が摩耗のため見えないが gur-mah 文書と内容が並行し gur-mah 使用と分かる文書が 4 枚ある。TSS 570, NTS<sub>5</sub> 65+, WF 73, 106. EDAT<sub>5</sub> では TSS 3, 728, 928 を gur-mah 文書としているが、gur-mah か gur か判然としない。
- 8) ファラ型不動産売買文書以外の lid<sub>2</sub>-ga 文書: CT 50, 8-13, F 16, 18, 359, 379, 381, 386, 388, 390, 391, 400, 487, 500, 505, 506, 507, 508, 971, 1171b, TSS 78, 93, 160, 209, 210, 684, 821, 881, NTS<sub>5</sub> 141, 157, 276, 296, WF 64, 79, 80-82.
- 9) 「ファラ型不動産売買契約文書」53 枚の内訳は、耕地売買契約 30 枚、家屋・家屋地売買契約 17 枚、破損のため売買物件不明 1 枚、家屋・家屋地売買複数件覚書 1 枚、家屋・家屋地と奴隷贈与契約 1 枚、証人リスト 2 枚。それぞれの文書番号については Martin et al. 2001: 139 参照。RTC 12 と WF 35 は不動産売買契約文書の範疇には属さないが、RTC 12 にはファラ型不動産売買文書の特徴のひとつである末尾のバラ職の記載がある点で、また WF 35 は証人リストだがおそらく不動産売買取引の証人であることから、これらの 2 枚はファラ型不動産売買契約文書に含められる。  
ZA 72, p.175 (W 18581) は発掘者によりウルク出土と記録された。シュタインケラーは、古代にファラからウルクへ運ばれた文書と推測したが、筆者はこの意見に賛同しない。
- 10) 数人の役人がファラ行政経済文書とファラ型売買契約文書の両方に見られる (Visicato 1995: 287)。
- 11) ヴィシカートが前3千年紀のメソポタミアにおける容量単位の推移を段階に分けて説明した箇所から、lid<sub>2</sub>(NI)-ga に関わる箇所を引用する。「[第1段階] 初期王朝期 II 期、シュメールの南では gur-sag-g 1 が、北では NI-ga が普及しており、NI-ga の中心はニップルだった。Durante il periodo Protodinastico II nella parte meridionale di Sumer è impiegato il gur-sag-g 1, nella parte settentrionale probabilmente il NI-ga, il cui centro di diffusion sembra essere Nippur. [第2段階] 初期王朝期 III 期初め、NI-ga はファラのあたりまで (南下)、IIIa 期に NI-ga は廃れ私的売買取引記録に残り、公的文書は gur-mah を導入。All'inizio del periodo Protodinastico III il Ni-ga sembra essuso del ere in uso almeno sino alla regione di Fara edNel Protodinastico IIIa a Fara il NI-ga sembra gradatamente cadere in disuso e continua a essere utilizzato quasi esclusivamente nelle contrattazioni private, mentre nella documentazione ufficiale è introdotto il gur-mah. [第3段階] Alla fine del Protodinastico IIIb e all' inizio si diffonde l'... [第5段階] 初期王朝期末からサルゴン期初めにかけて、ニップルで NI-ga が、アダブとニップルで 240 sila<sub>3</sub> の gur-mah と gur-sa<sub>2</sub>-du<sub>11</sub> が使用された」(Visicato 1992: 9)。
- 12) ヴィシカートは EDAT<sub>5</sub> 183-202 で 16 枚の lid<sub>2</sub>-ga 文書の翻字を発表し、ファラの容量単位に対する北の勢力の影響について簡単に触れた。EDAT<sub>5</sub> 183 参照。
- 13) GUR が 6 例: OIP 99 no.490-1, 494-5, 500, 502. GUR.SAG.GAL<sub>2</sub> が 1 例: OIP 99 no.503. アブ・ツアラビーク文書を出版したピッ

- グス (R. Biggs) は、ファラ文書との共通点が多く見られるとして両者は同じ頃に作成されたとする。
- 14) TSS 247 の冒頭に、še 244 gur-mah (「大麦 244 gur-mah」)、そして裏面第1欄2行目に KA-ni kiš (「キシユ (の) カニ」) とある。
- 15) ヴィシカートの説明に筆者が若干言葉を補った。
- 16) [1] WF 61 → [2] WF 106 · TSS 58 · TSS 570 → [3] WF 76。下部文書 WF 61 (31人) と中間集計文書 106 (67人)、TSS 58 (37人)、570 (31人) は相互に重なる部分があり、また受給者がおよそ 150 人の総計文書 WF 76 と同所でも重なるが、受給者の記載順序はすべて一致する。
- 17) TSS 415 i 2, 420 i 1', 752 ii 4。
- 18) そのほか mah<sub>2</sub>(AL)を用いる文書としては Hur-sag-mah<sub>2</sub>-še<sub>3</sub> (人名) : TSS 263 ii 2, Lugal-a<sub>2</sub>-mah<sub>2</sub> (人名) : TSS 290 ii 1 があるが、これらに対応する総計文書がいまのところ見つからない。
- 19) \*Nin-mah<sub>2</sub>(AL)については Cavigneaux and Krebernik 2000: 326。
- 20) WF 55 (EDATŠ no.59) i 1) 11.2.0.0 še gur-mah 2) ġanun-mah 3) 6.0.0.0 še gur(-mah) 4) 3<sup>1</sup>/<sub>2</sub>.0.0.0 ġanun 5) gur<sub>2</sub>-gur<sub>2</sub> ii 1) še-numun iii [blank] rev. i 1) an-še<sub>3</sub>-gu<sub>2</sub> 2) 21gur-mah 3) še-numun 4) 37(bur<sub>3</sub>) 9 iku. i 1-2) 大麦 5400 ℓ をマフ穀物貯蔵庫 (から支出した)。3) 大麦 2880 ℓ を (支出した)。4-5) 大麦 1880 ℓ をグルグル (が責任者である) 穀物貯蔵庫 (から支出した。) ii 1) 播種用大麦 (の支出)。(裏面) i 1) 合計 2) 大麦 10080 ℓ 3-4) (以上は) 243 ヘクタールの耕地へ播く播種用大麦 (の支出)。(筆者翻訳)
- 21) ジョージは “Exalted House which Gives Life” と訳す (George 1993: 121)。
- 22) ELTS no. 33 rev. iv 6) AN.RU-KEŠ<sub>3</sub>-ta. AN.RU をシュタインケラーが言うように \*Sud<sub>3</sub> と読めれば、人名 \*Sud<sub>3</sub>-Keš<sub>3</sub>-ta 「スドゥウ神はケシュから」と読める (ELTS 104)。
- 23) ARET 8 531, 49, 2, 523, 35, nar-mah<sub>2</sub> of Mari。
- 24) a-HAR × DIŠ の内容については不明である。初期王朝期マリ文書はシャルパンが出版した 53 枚以外に、マリ出土が推測される 8 枚がある (cf. Charpin 1987, 1989; Horioka 2008)。
- 25) 23) Father Enlil, you bring the lofty lidga-measure, you pour people into the baskets,  
24) Lord of the country, you bring the bariga-measure, you carry the baskets for trade.  
25) Father Enlil, the loyal ones are taken in trade for the traitors. (Civil 1976:73)  
23 行目の先頭から 8 つ目の文字は DA であるが、シヴィルはこの文字は ID の誤りであるとして id と翻字した。eršem<sub>3</sub> BM 13963 (CT 15 10) はキング (L. W. King) により出版され、その後ファルケンシュタイン (A. Falkenstein) とクレマー (S. N. Kramer) が翻訳を出したシュメール語儀礼歌で、筆者の手元にある手写ではたしかに文字は DA である。
- 26) シヴィルは 25 行目 saġ を、ウル第 3 王朝期の文書に見られる動詞表現 saġ-ġal<sub>2</sub> に基づき「追加分」を表すと解釈した (Civil 1976: 74-75)。
- 27) シヴィルは saġ を「追加分」と訳したのであるが、エブラに「負債」と解釈される saġ の例があり、筆者は後者を採用する。MEE 10/MVS 1 134, Text 27 rev. iii 11 と iv 1 "1 saġ : saġ has been understood as an abbreviation of saġ-...-še<sub>3</sub>."
- 28) シヴィルは次のように翻訳した。  
10) Enlil is the merchant of the wide earth (or the Ki-ur).  
11) The scales of the Lord weigh out generously,  
12) The weights of the Lord can hold ....  
13) (From) his seat, the Lord plunders cities.
- けれども 13 行目については、文字通りには “The Lord, his seating places, plunders cities.” であるとコメントしている (Civil 1976: 73, n. 8)。
- 29) 『ヘンドゥルサグ神讃歌』の中の該当する箇所を The Electronic Text Corpus of Sumerian Literature の翻字に基づき、また英語訳を参考にして日本語訳を付けた。ただし英語訳下線部分を斜体部分のように変更した。Segment C 32) \*utu ki giš-rin<sub>2</sub>-na-ka mu-un-gub 「ウトウ神が秤の場所 (取引場所) に立つ」 33) tukum-bi lu, gud in-sa<sub>10</sub>-sa<sub>10</sub> 「もし人が牛を買おうとするなら」 34) \*utu \*hendur-saġ-aġ<sub>2</sub>-ra en<sub>3</sub> mu-na-tar-re 「ウトウ神はヘンドゥルサグ神に尋ねる」 35) [lu<sub>2</sub>] gud sa<sub>10</sub>-sa<sub>10</sub>-de<sub>3</sub> igi-gal<sub>2</sub>-la-ni nu-mu-na-ab-be<sub>2</sub> 「牛を買おうとする人に彼 (ウトウ神) の見識を (ウトウ神自身が) 伝える事はない」 36) tukum-bi \*hendur-saġ-aġ<sub>2</sub>-ke<sub>3</sub> gud sa<sub>10</sub>-sa<sub>10</sub>-da mu-na-ab-be<sub>2</sub> 「もしヘンドゥルサグ神に、牛を買いたいと彼 (ヘンドゥルサグ神) に言うなら」 37) \*utu tur<sub>2</sub>-ni du<sub>2</sub>-a-bi nam im-mi-ib-tar-re 「ウトウ神は彼 (牛を買う人) の牛小屋全体に運命を定める → 牛小屋の値段を決定する。」
- 30) エブラ文書では šu-bal-ak 「交換する」の意味で用いられる (Pomponio 1998: 128, n.7)。
- 31) MVN 10 85 rev. iii 4) bala 5) maš<sup>a</sup>-sud<sub>3</sub> 6) URU × UD<sup>bi</sup>。ここには ensi<sub>2</sub> の肩書が抜けているが、もう 1 枚の家屋売買文書 PBS 9 3 = CBS 6164 の末尾には bala maš<sup>a</sup>-sud<sub>3</sub> URU × UD<sup>bi</sup> ensi<sub>2</sub>-bi とある。手写を出版したバートン (G. A. Barton) は URU × GAR<sup>bi</sup> と翻字したが、バートンの手写は不鮮明であり、また UD と GAR の字形は似ているので、おそらく URU × GAR<sup>bi</sup> ではなく URU × UD<sup>bi</sup> である。
- 32) Maš<sup>a</sup>-Sud<sub>3</sub> をバラ職として記載するファラ型不動産売買文書 [耕地売買] ZA 72 (ウルク出土)、RTC 14 (出土地不明) [家屋売買] TMH 5 75 (ニップル出土)、PBS9, 3 = CBS 6164, MVN 10 82, 83, 85, SEL 3 (以上 5 枚は出土地不明)。
- 33) lid<sub>2</sub>-ga 文書: ECTJ 28, 39, 59, 69, 102, 119, 122, 124, 127-38, 148, 150, 185-6, 191, 200, 203, OSP 1 18, 23, 61-4, 66-73, 76-80, 82-3, 112, 124, 129, OSP 2 45, 58-60, 69-71, 73, 77, 97, 100, 108, 113-4, 124, 128-9, 136, 150-1, 155-6, 158, 164, 166-7, 171, 174, 179-82。
- 34) それまでニップルとされていた文書をイシンと確定し (‘Lambert Tablet’ = Lambert 1979: MAD 4 152, 153, 170, MVN 3 13, 36, 53, 67, TLAT no.4-6, 46, BIN 8 34, 37, 80, 167, 168, 180 ほか)、それに未出版文書 (NBC 6844, 6900 など) をあわせた 19 枚を人名一致から相互関係を認め、そこではイシンの都市名や地名が散見されること、‘Lambert Tablet’ に記されたウルクの王 (lugal) ウルザエ (Ur-za<sub>2</sub>-e<sub>2</sub>) が初期王朝期に年代付けられることなどから、これら 19 枚を初期王朝期末からアッカド初期のイシン文書とした (Steinkeller and Postgate 1992: 5-8)。
- 35) エンリル神の名をファラ文書では一貫して EN.LIL<sub>2</sub> ではなく EN.E<sub>2</sub> と記すので、本稿では \*En-lil<sub>2</sub> ではなく \*En-lil<sub>2</sub> と書き表す。
- 36) ファラとはシュルツパク市に隣接した地に建設中の交易拠点と筆者は考える。
- 37) bala 職とは “Wechselamt” (交代職) を意味し、ウル第 3 王朝期の制度「バラ・システム (帝国内の物品交換)」と同義であろう。ウル第 3 王朝期にはウル王朝支配下諸都市と属州のエンシが交替でエンリル神殿維持のために奉仕した (Sallaberger 1999: 195-196; 前田 2004: 692)。
- 38) ファラ型不動産売買文書の末尾に記すバラ職としては 8 人の名が知られており、そのうちのマシュスドゥとイニマニにはエンシの肩書が付く。またアブズキドゥとナムマフはニップルのエンシであることが他の証拠から判明している。マシュスドゥは位置不明の URU×UD<sup>bi</sup> のエンシである。

## 略号

- AAICAB 1/2 Ashm. Museum number of the Ashmolean Museum of Art and Archaeology in Oxford, In J.-P. Gr goire 1996 *Contribution à l'histoire sociale, économique, politique et culturelle du proche-orient ancien, archive administrative, et inscriptions cuneiforms de l'Ashmolean Museum et de la Bodleian Collection d'Oxford, Les Sources I*. Paris, GEUTHNER.
- ARET 8 Sollberger, E. 1986 *Administrative Texts Chiefly Concerning Texteiles (L. 2752)*, Archivi reali di Ebla, Testi 8. Missione Archeologica Italiana in Siria. Universit degli Studi di Rome. Rome, La Sapienza, Dipartimento di Scienze Storiche, Archeologiche e Antropologiche dell'ntichit.
- BM Tablets in the collections of the British Museum.
- CBS Tablets in the Collections of the Babylonian Section of the Pennsylvania University Museum of Archaeology and Anthropology.
- CT 15 Handcock, P. S. P. and L.W. King 1902 *Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum, Vol. 15*. London, Trustees of the British Museum.
- CT 50 Sollberger, E. 1972 *Pre-Sargonic and Sargonic Economic Texts, Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum*. London, The Trustees of the British Museum.
- ECTJ Westenholz, A. 1975 *Early Cuneiform Texts in Jena: Pre-Sargonic and Sargonic Documents from Nippur and Fara in the Hilprecht-Sammlung vorderasiatischer Altertümer Institut für Altertumswissenschaften der Friedrich-Schiller-Universität, Jena*. Copenhagen, Munksgaard.
- ETCSL Electronic Text Corpus of Sumerian Literature.
- EDAT< Pomponio, F., G. Visicato and A. Alberti 1994 *Early Dynastic Administrative Tablets of <urupak*. Napoli, Istituto universitario orientale di Napoli.
- ELTS Gelb, I. J., P. Steinkeller and R. M. Whiting 1991 *Earliest Land Tenure Systems in the Near East Ancient Kudurrus*. Oriental Institute Publications 104. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- F Field number of the Schmidt's tablets from Fara housed in the University Museum.
- Lambert Tablet Lambert, M. 1979 *Grand document juridique de Nippur du temps de Ur-zag-e, roi d Uruk. Revue d assyriologie et d arch ologie orientale* 73: 1-22.
- MAD 4 Gelb, I. 1970 *Sargonic Texts in the Louvre Museum*. Chicago, The University of Chicago Press.
- MEE 10/MVS 1 Mander, P. 1990 *Administrative Texts of the Archive L. 2769. Materiali per il Vocabolario Sumerico /Materiali Epigrafici di Ebla* 10 1. Rome, La Sapienza.
- MVN 3 Owen, D. I. 1975 *The John Frederick Lewis Collection. Materiali per il Vocabolario Sumerico* 3. Rome, Multigrafica Editrice.
- NBC Tablets in the Babylonian Collection, Yale University Library.
- OIP 99 Biggs, R. D. 1974 *Inscriptions from Tell Abū Šalābīkh*. Oriental Institute Publications 99. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- OSP 1 Westenholz, A. 1975b *Old Sumerian and Old Akkadian Texts in Philadelphia, Chiefly from Nippur Part One: Literal and Lexical Texts and the Earliest Administrative Documents from Nippur. Bibliotheca Mesopotamica I*. Malib, Udena Publications.
- OSP 2 Westenholz, A. 1987 *Old Sumerian and Old Akkadian Texts in Philadelphia, Part Two*. Copenhagn, Museum Tusculanum Press.
- PBS 9 Barton, G. A. 1917 *Sumerian Business and Administrative Documents from the Earliest Times to the Dynasty of Agade*. Publications of the Babylonian Section, University Museum, University of Pennsylvania. Philadelphia, University of Pennsylvania.
- RTC Thureau-Dangin, F. 1903 *Recueil des Tablettes chaldéennes*. Paris, Leroux.
- SEL 9 Visicato, G. 1991 *Uso e diffusione di alcune unità di misura in period Presargonico e Sargonico: NI-ga e gur-sag-gál. Studi epigrafici e linguistici* 9: 3-10.
- SF Deimel, A. 1923 *Die Inschriften von Fara II: Schultexte aus Fara*. Wissenschaftliche Veröffentlichungen der Deutschen Orient Gesellschaft 43. Leipzig, Otto Zeller.
- SRJ Edzard, D. O. 1968 *Sumerische Rechtsurkunden des III. Jahrtausends aus der Zeit vor der III. Dynastie von Ur*. München, Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- TLAT Steinkeller, P. and J. N. Postgate 1992 *Third-Millennium Legal and Administrative Texts in the Iraq Museum, Baghdad*. Winona Lake, Eisenbrauns.
- TMH 5 Pohl, A. 1935 *Vorsargonische und Sargonische Wirtschaftstexte: Autographiert und mit Inventarverzeichnis und Namenlisten versehen. Texte und Materialien der Frau Professor Hilprecht Collection of Babylonian Antiquities*. Leipzig, J. C. Hinriches'sche Buchhandlung. Collection, Hilprecht-Sammlung, University of Jena, Germany. Museum.
- TSS Jestin, R. 1937 *Tablettes sumériennes de <urupak conservées au Musée de Stamboul. Mémoires de l'Institut Français d'Archéologie de Stamboul III*. Paris, Akademie Verlag.
- NTSS Jestin, R. 1957 *Nouvelles Tablettes sumériennes de <urupak au Musée d'Istanbul. Bibliothèque archéologique et historique de l'Institut français d'archéologie d'Istanbul II*. Paris, Akademie Verlag.
- UVB 10 Nördecke, A., E. Heinrich and H. Lenzen 1939 *Zehnter vorläufiger Bericht über die von der Deutschen Forschungsgemeinschaft in Uruk-Warka unternommenen Ausgrabungen, APAW*. Berlin.
- WF Deimel, A. 1924 *Die Inschriften von Fara III: Wirtschaftstexte aus Fara*. Wissenschaftliche Veröffentlichungen der Deutschen Orient Gesellschaft 45. Leipzig, Otto Zeller.
- ZA 72 p.175 Green, M. W. 1982 *Miscellaneous Early Texts from Uruk. Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie* 72: 163-177.

## 参考文献

- Cavigneaux, A. and M. Krebernik 2000 *Nin-AL. Reallexicon der Assyriologie* 9: 326.
- Charpin, D. 1987 *Tablettes présargonique de Mari. Mari: Annales de recherche interdisciplinaires* 5: 65-125.
- Charpin, D. 1989 *Nouvelles tablettes présargonique de Mari. Mari: Annales de recherche interdisciplinaires* 6: 245-251.
- Civil, M. 1976 *Enlil, the Merchant: Notes to CT 15 10. Journal of Near Eastern Studies* 28: 72-81.
- Edzard, D. O. 2000 *Nin-Isina. Reallexicon der Assyriologie* 9: 387-388.
- Englund, R. K. 2002 *Critical Review: Martin, H. P. et al. 2001 The Fara Tablets in the University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology. Bethesda, CDL Press. Journal of Cuneiform Texts* 54: 125-131.
- Frankena, R. 1957-1971 *Gula. Reallexicon der Assyriologie* 3: 695-697.
- Frayne, D. R. 1992 *The Early Dynastic List of Geographical Names*. New Heaven, American Oriental Society.

- Frayne, D. R. 2008 *Presargonic Period (2700-2350 BC), the Royal Inscriptions of Mesopotamia Early Periods, Vol. 1*. Toronto, Buffalo and London, University of Toronto Press.
- George, A. R. 1993 *House Most High: The Temples of Ancient Mesopotamia*. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Horioka, H. 2009 Additional Early Dynastic Tablets Possibly from Mari. *Oriens* 44: 121-150.
- Krebernik, M. 1986 Die Götterliste aus Fara. *Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie* 76: 161-204.
- Krebernik, M. 1998 Die Texte aus Fara und Tell Abū Ṣalābīkh. In J. Bauer, R. K. Englund and M. Krebernik (eds.), *Mesopotamien: Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit, Orbis Biblicus et Orientalis* 160/1, 237-427. Freiburg, Vandenhoeck und Ruprecht.
- Krebernik, M. 2003-2004 Pabilsag(a). *Reallexicon der Assyriologie* 10: 160-167.
- Martin, H. P., F. Pomponio, G. Visicato and A. Westenholz 2001 *The Fara Tablets in the University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology*. Bethesda, CDL Press.
- Pomponio, F. 1983 Archives and the Prosopography of Fara. *Acta Sumerologica* 5:127-145.
- Pomponio, F. 1998 The Exchange Ratio between Silver and Gold in the Administrative Texts of Ebla. *Acta Sumerologica* 20: 127-133.
- Pomponio, F., G. Visicato and A. Alberti 1994 *Early Dynastic Administrative Tablets of Suruppak* Napoli, Istituto Universitario Orientale.
- Powell, M. A. 1978 Texts from the Time of Lugalzagesi: Problems and Perspectives in Their Interpretation. *Hebrew Union College Annual* 49: 1-58.
- Powell, M. A. 1989 Masze und Gewichte. *Reallexicon der Assyriologie* 7: 457-530.
- Sallaberger, W. 1999 Ur III-Zeit. In W. Sallaberger and A. Westenholz (eds.), *Orbis Biblicus et Orientalis* 160/3, 121-390. Freiburg, Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen.
- Visicato, G. 1989 Fara ed Ebla: Nuove prospettive storico-politiche nel period protodinastico. *Oriens Antiquus* 28: 169-176.
- Visicato, G. 1992 Un testo di assegnazioni d orzo ad Abu Salabikh. *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* (n.) 4: 87-89.
- Visicato, G. 1992 Unità di misura di capacità a Fara: bariga e gur-mah. *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* (n.) 4: 87-89.
- Visicato, G. 1995 *The Bureaucracy of Suruppak, Administrative Centers, Central Offices, Intermediate Structures and Hierarchies in the Economic Documentation of Fara*. Münster, Ugarit-Verlag.
- 小泉龍人 2001 『都市誕生の考古学』同成社。
- シュマント=ベッセラ、D. (小口好昭・中田一郎訳) 2008 『文字はこうして生まれた』岩波書店。
- 堀岡晴美 1997 「シュルツパク売買契約文書の年代」『オリエント』40巻2号 1-17頁。
- 堀岡晴美 2006 「時代区分名称『ファラ期』を見直す」『特定領域研究セム系部族社会の形成 平成17年度研究報告』63-67頁。
- 前田徹 2004 「バル義務」日本オリエント学会編『古代オリエント事典』692頁 岩波書店。
- 前田徹 2006 「ウル第三王朝時代ウンマ文書における王のサギ」『早稲田大学大学院文研究科紀要』51輯4分冊 35-46頁。

堀岡 晴美

国士舘大学大学院博士課程

Harumi HORIOKA

Kokushikan University